
流星のロックマン4 ラストエンジェル

earth

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン4 ラストエンジェル

【Nコード】

N2236Y

【作者名】

earth

【あらすじ】

世界を3度救った英雄その名もロックマン。

メテオGを破壊してから、2年後の話。

中学1年生になった、スバル達は、楽しい学校生活を送っていた。

しかし、その幸せもつかの間、今度の敵は、他国の軍事？

太陽系外の惑星？

裏切り物は、一体誰だ。

スバル達を待つ運命は、希望か絶望か。

現在、蠢く陰謀 編

。

プロローグ(前書き)

earthです。初めての投稿です(^-^)
頑張りたいと思います。

プロローグ

ここは、太陽系外のとある惑星。

コンコンと、2回ノックをして、黒い服の男が中に入った。

「失礼します。」

「何だ、ピエール。」

奥に居る男が、話し掛けた。

黒い服の男の名前は、ピエールという、背が高く、眼鏡をしていて、鼻が高く、目つきが鋭い。

「アダム様、例の物なのですが……」

奥に居る男の名前はアダムという。
髪の色が銀色で、肌が白い。

「例の物がどうした。」

「はい、完成いたしました。」

ピエールが真剣な顔で言う。

「本当か」

「はい、今はレベル6をも倒しております」

「そうか、もうレベル6か。」

「今は、インフェルノモードを使えるかどうか、実験中です。」

「わかった、もういいぞ。」
とアダムはピエールに告げた。

「はい、わかりました。」
そう言い、ピエールは、部屋をでていった。

「フッフッフッくようやく完成したようだな
これで地球は、私の物だ。私の邪魔など
誰にもさせない。」

アダムはそっくり、謎の部屋に入っていった。

プロローグ（後書き）

結構難しいですね。) ;)
感想よろしくお願ひします。 \ (^ o ^)
 /

転校生は、アイドル？（前書き）

ミソラが出てきますよー／＼（＾○＾）（／

転校生は、アイドル？

メテオGの事件から2年後、スバル達は、コダマ中学校の生徒になっていた。

「また、同じクラスね。」

この人は、みんな知つての通り、白金ルナ僕等は、未だに委員長と呼んでいる。

「知らない顔もいますけど、ほとんど小学校のまんまですね。」

この人は、最小院キザマ口物知りだけど、背が低いことを気にしているらしい。

「腹、減つたな〜。」

「ゴンタ君、いつも食べることにしか考えないのは、やめてください。」

いつも、食べる事しか考えない、この人は、牛島ゴンタ、見るからにして、ガキ大将にしかみれない。しかし、ウィザードのオックスと電波変換して、

「オックス・ファイア」になるんだ。頼もしいつちや頼もしい。

「でもさ、みんな一緒に良かったじゃん。」

「それもそうね。」

……と4人でやり取りしていたら、先生が入ってきた。

「席につけ、朝の会を始めるぞ」

『ハイ』

「とその前に今日は、転校生がきているぞ」

『本当？』 『男かな女かな』

などという声が辺りから聴こえた。

「入ってきなさい」

と先生が転校生を呼んだ

入ってきた、瞬間、クラスが全員か、固まった。

「今日から、みんなと授業を受ける、

響だ、みんな、仲良くするように。」

「今日から、このクラスで授業を受ける事に

なりました。響ミソラです。よろしくお願

いします。」

転校生は、アイドル？（後書き）

つぎはクラス戦争がおきます（ ;
次回もよろしくお願いします。（
（

学校で（前書き）

3話目できたぜ〇（＾　＾）
〇

学校で

響ミソラの自己紹介（みんな知ってるけど）が
終わったが、クラス全員は固まっていた。

「じゃあ、響の席は…」

先生の言葉に、固まっていたはずの男子生徒（スバル以外）の目い
つせいに鋭く光った。

『はいはいはい、ミソラちゃんは、僕（俺）
の隣で〜』

その光景を見たスバルは、苦笑いしか出来なかった。

『あの女、スゲー人気だな。』

ハンターV.Gの中から声が聞こえた。

「そうだね、ロック。やっぱり国民的アイド
ルは、違うね。」

『スバル。でもよ、俺達は世界を3度救った
英雄だぜ。』

「それは、関係ないでしょ。」

こいつは、ウォーロック。AM星生まれのFM星育ち。通称ロック。
ロックと出会ったのは

3年前のFM星襲撃の時だった。ロツクは、アンドロメダのカギをFM星から盗み、地球に逃げ込んだ。僕は、ロツクと出会って良かったと思う。もし出会ってなかったら、
父さんも救えなかったし、地球も終わっていただろう。

学校で(後書き)

感想よろしく／(^ o ^)
／

学校で2(前書き)

4 話目出来たぞ

学校で2

『なあ、スバル。』

「何、ロック。」

『あの女がきたって事は…もしたして。』

ハンターにもう1体増えた。

『ポロロン、それは一体誰のことかしら』

『げえっ！ハーブ。』

『スバル君、お久しぶりね。』

こいつは、こと座のハーブ。3年前のFM星人襲撃の時に地球に来た。歌うことに悩んでいた、ミソラにとりつき、人を傷つけはじめたがロックマンに止められ、今は、ミソラのウィザードとなっている。

電波変換すると、「ハーブ・ノート」になる。

『おい！ハーブ、早くあの女の所に帰れ。』

『うるさいわね、ウォーロック。』

そう言った、ハーブの拳がウォーロックの顔面にヒットした。

『グッハツ。何するんだハーブ。』

ハーブは、容赦なく殴り付けた。さすがのウォーロックも気絶していた。

2体のやり取りを見ていた。

『俺の隣に』 『いや、僕の隣に』 という
声が周りの男子生徒の声が聞こえた。

すると、ミソラが

「先生。私、スバル君の隣を希望 します。」

「ん。そうか。おい星河、隣いいか。」

「えっ… あっ、はい。大丈夫です。」

ギリリ！

男子生徒全員とドス黒いオーラをまとった
委員長達の殺意のこもった、鋭い目が
スバルに向けられた。

（大丈夫かな、僕の中学校生活）

スバルの、思いも知らず、
ミソラは明るかった。

「よろしくね。スバル君」

「じゃあ、授業をはじめろぞ。」

「放課後」

授業が終わり、みんなは帰る支度をしていたスバルは、ミソラに話かけられた。

「スバル君、後で屋上に来て。」

「いいけど、どうしたのいきなり。」

「内緒だよ。」

学校で2（後書き）

テスト勉強はじめなきや
エリアの騎士おもしろい

学校で3(前書き)

5話目きた〜

ではどういぞ

学校で3

スバルは、ミソラに屋上に呼ばれたため、今は、学校のエレベーターの前にいる。

「ロック。なんで、ミソラちゃんは、僕を屋上なんか呼び出すんだろっかね？」

『知らねえ。俺に聞くな。』

「そっだよね。」

チンと音がなり、エレベーターのドアが開いた。

くコダマ中学校 屋上く

エレベーターに乗ったスバル（ロック）は、屋上に来ていた。

「あれ、誰もいないじゃん。」

すると後ろから、目隠しをされた。

「だーれだ」

「うわぁ（こっぴつうのって間違えた方がいいんだよね。（ゴンタかな？）」

「当たり前。」

「嘘だろ。」

スバルは考えもしない、答えがかえってきたので、びっくりして目を隠しをしていた人の手をどけた。すると、目の前には、ミソラがいた。

「やっぱり、ミソラちゃんか。」

「やっぱりってなによ、やっぱりって。」

「いや、別に。てか呼び出したりして、どうしたの。」

そしたら、ミソラの頬が、赤くなった。

「あのね、ス、スバル君、わっ私になんで転校してきたか知ってる？」

「ミソラちゃん、頬赤くなってるよ。熱でもあるの？」

「ううん、大丈夫。」

「そう、それならいいけど。ミソラちゃんが転校してきた理由でしょ。分からないよ。」

「そっだよ。私ね、スバル君に会いたかったんだ。」

「僕も会いたかったよ。」

「スバル君の会いたかったは、友達としてで
しょ。」

「どづいつこと?」

ミソラは何か決心した表情をしていた。

「私ね。スバル君のことが好きなの。」

「ふうーん……えっ、それって。」

ミソラは、コクツと頷いた。

「スバル君は、私のこと好き?」

いま、スバルは、すごいテンパってる。

「私のこと好き?」というミソラの言葉が
頭の中をぐるぐる回っている。

学校で3(後書き)

テスト勉強はじめなきゃ

僕で良ければ。(前書き)

連続でUPしました。

ミソラちゃんって可愛いですよ。

スバルが、羨ましい。

僕で良ければ。

スバルは、とてもパニックに陥っていた。

なぜなら、目の前には、国民的アイドルがいてその人は、自分のできた初めてのブラザーであり、命に変えてまでも守った人だったから。

「ミソラちゃん、本当に僕でいいの？」

「うん。スバル君じゃなきゃダメなの。」

「僕で良ければ、お願いします。」

「スバル君……グスツ、ウエエエン」

ミソラは、泣きくずれてしまった。

「ミソラちゃん、大丈夫？なんか悪いことした？」

「クズツ、ううん、嬉し泣き。」

「そうか。良かった。」

「スバル君……」

ミソラは、そういって、スバルに抱きついた。

「ミソラちゃん、やめてよ。」

スバルの顔が、急激に熱くなった。

「もう、少しだけ。」

どれくらい時間がたっただろう、も夕日が沈みそうでした。

「ミノラちゃん、そろそろ帰ろっか。」

「そうだね。」

僕で良ければ。(後書き)

そろそろ、敵キャラ出さなきゃな。

嘘だろ！（前書き）

テスト勉強しなきゃいけないのですが
投稿します。

嘘だ〜！

スバルとミソラは、中学校を出て、住宅地を並んで歩いていた。

「ミソラちゃんの家ってベイサイドシティーだよね。」

「そうだよ。それがどうしたの。」

「イヤ、あのさ、家がベイサイドシティー
なんだからさ、電波変換で帰ればいいのに。」

「スバル君は、私と帰るのイヤ？」

ミソラは、今にでも泣きだしそうだ。

スバルは、ミソラのこの顔に一撃で、やられた。

「いや、ちっ、違うよ。コダマからミソラちゃんの家って遠いじ
ゃん。」

(スバル君、この顔に弱いな これから、この顔で甘えよう)

ミソラの泣きそうな顔は、すべて演技だった。スバルは、このこと
に気がつかない。

「うん。そのことは、大丈夫だよ。」

「ふーん。わかったよ。」

「これからさ。スバル君の家に行っていていい？」

「いいと思うよ。」

それから、数分後、スバルの家が見えてきた。

「うわあ、スバル君の家久しぶりだな。」

「そうだね。さあ、入ろっか。」

「スバルの家」

「母さん、ただいま。」

「お邪魔します。」

「スバル、ミソラちゃん、ご飯できてるわよ。」

この人は、僕の母さん、星河茜。

今は、僕と父さんと母さんの3人で住んでいる。

「僕は、まだしも何故ミソラちゃん？」

そう言うと母さんは、不吉に笑った。

「スバル、聞いて驚きなさい。今日から、

ミソラちゃんがこの家で住む事になったの。」

「はい、よろしくお願いします。」

僕の脳が一時的にストップした。

「嘘だ。」

嘘だ〜！（後書き）

どうでしたか？感想待ってます。

ミシラの家(前書き)

連続でup

ミソラの家

スバルは、今、頭がおかしくなっている。

「ミソラちゃんが、僕の家。ハハハッ夢だよね。」

「スバル君のお母さん、スバル君が、スバル君が、おかしくなりました。」

「大丈夫よ。いつものことだから。」

スバルは、母のことばを聞いて目を覚ました。

「母さん、誰がおかしいって？」

「あなたの事よ、スバル。」

この2人のやり取りを見ていたミソラが笑った。

「何がおかしいの、ミソラちゃん。」

「いやー。スバル君の家って賑やかだなと思って。」

「ミソラちゃん。ここは、今は、あなたの家なの、だから私のことをお母さんと呼ぶこと

それと、帰って来たら、お邪魔します。じゃなくて、ただいまよ。

私もミソラって呼んでもいい？」

ミソラは、もう泣きそうだった、茜は、やさしいミソラを抱き寄せ

た。

『いいな、家族って。』

「あれ、ロックいつの間に行ったの？」

『ずっと居たぜ。』

「静か過ぎてわからなかったよ。」

ミソラの家（後書き）

ねむいですが、頑張って書きました。

地球へ

「太陽系外の惑星」

「アダム様、どうしますか。すぐにもガンマ部隊でも、地球に送りますか？」

アダムは、少しの間だけ考えた。

「いや、ヒートを呼べ。」

「わかりました。」

ピエールは、そう告げると部屋を出て行った。数分後ピエールは、赤い髪の男と一緒に入ってきた。

「アダム様、ヒートを連れて来ました。」

「うむ、ヒートよ、今から地球にいつて来い。」

「アダム様、それって、地球消していいの？」

アダムは、飽きた顔で言った。

「ヒート、お前は、いくつ惑星を消せばいいんだ。残念だが、まだ、消すな地球人には、例の物を使う。お前は、オーパーツを探せ。」

「オーパーツを、探すのは、いいけど、喧嘩は、売っていいんだな。」

「
構わん。好きにせい。」

「わかりました、じゃあ、いってきます。」

「本当に、良かったのですか、アダム様。」

「いいんだ。結局奴も捨て駒だ。」

「ですが、ヒートを止められる奴っていますか。」

「地球には、青き流星と呼ばれている、地球を3回救った奴がいると、噂だ。」

「青き流星ですか、興味深いですね。」

「スバルの家」

今は、茜とミソラが、二人で夕食の準備をしていた。ミソラは、一人で今まで生活していたから、料理が得意である。

「なんか、本当の親子見たいだね。」

スバルは、この光景を見た本心であろう。

楽しく、しゃべりながら料理している、二人は、本当の親子見たいだった。

地球へ（後書き）

どうでしたか。感想待ってます

家で

スバルは、ミソラと茜が夕食の準備をしているので、スバルは、自分の部屋にいた。

「ミソラちゃんと母さん、本当に親子見たいだったね。」

『ああ、そうだな。だがスバル、お前とミソラも夫婦みたいな物だろ。』

スバルは、とても顔を熱くした。

「なつ、何言ってるんだよ。そんな訳ないじゃないか。」

『言い逃れはよくないぜ、スバル。俺は、見ちゃったんだ。』

「誰と？」

『ハーブとだ、残念だったな。おフクロに言わなきゃな。付き合っていること。』

スバルは、辞めると言おうとしたが、イヤな時にイヤな人が、はいってくる。

「スバル、その話し本当？」

そこにいたのは、茜だった。

「母さん、聞いてたの？」

「バッチリね。」

茜は、腕を出し親指を立てた。

「で、付き合っているの、スバル。」

「えーっと、付き合って「付き合ってますよ。」

そこに入ってきたのは、ミソラだった。

「ミソラちゃん、何言ってるの。」

「えー、いいじゃん、付き合ってるんだから。」

「スバルは、幸せもんね。こんなに可愛い子が彼女だなんて。」

(ロックこの状況なんとかして。)

《俺に聞くなよ。》

ミソラは、何故か顔が真っ赤だった。

たぶん、茜に可愛いと言われたからだろう。

その時スバルのハンターV.Gが鳴った。

(ナイスタイミング)

スバルは、そう思い、エアディスプレイをだした。そこには、見おぼえのある、顔が出てきた。

「久しぶりだな、スバル。」

「シドウさん、退院したんですね。」

ディスプレイに映っている、男は、暁シドウ

と言う。サテラポリスのエースとして、活躍していたが、ジョーカ
ーと戦い、死んだと思われていたが、ウィザードのアシッドのお陰
で、助かった。今は、ジャック、クインティア、と共に、サテラポ
リスにいて、最近、退院したらしい。

「スバル、明日は、暇か？」

「明日は、土曜日なので、大丈夫です。」

「そうか、じゃあ渡したい物がある、明日、サテラポリスに来てく
れ。」

「はい、わかりました。」

家で（後書き）

漢検あきらめます

一緒に

スバルと茜、ミソラは、夕食を食べていた。

「ミソラが、スバルとね。」

「母さんもついででしょ。」

「ミソラ、空き部屋作ったけど、どうする、スバルの部屋にする。」

「スバル君の部屋で。」

「即答。ミソラちゃん、ダメだよ。僕男だよ。」

「大丈夫だよ。スバル君、君は、そんなことは、しないキャラだから。」

「いや、キャラって。」

そんなやり取りをしていたら、大悟が帰ってきた。

「父さん、お帰り。」

「大悟さん、お帰りなさい。」

「お邪魔してます。」

「あっ、ミソラちゃん。いらっしやい。」

「大悟さん、ご飯にする？」

「飯にするよ。」

この一人は、星河大悟。僕の父さん。

今は、大悟、茜、スバル、ミソラでご飯を食べている。

「へえー、スバルとミソラが。」

スバルとミソラは、顔を真っ赤にして、ご飯を食べている。何故なら茜が付き合っていることをチクったのである。

「スバル、良かったな。」

「もう、辞めて、ご馳走でした。」

スバルは、さっそうと自分の部屋に帰って行った。

『スバル、顔真っ赤だぜ。』

「うるさい、ロック。」

くリビングく

今は、大悟、茜、ミソラで食べている。

「ミソラ。」

「はい？」

「スバルをよろしくない。」

ミソラは、頷きスバルの部屋に向かった。

「良かったな。スバル。」

「そうね。青春ていいわね。今日は、大悟さんに甘えようかな。」

「辞めるよ、茜。」

部屋での出来事

スバルと茜、ミソラは、夕食を食べていた。

「ミソラが、スバルとね。」

「母さんもついででしょ。」

「ミソラ、空き部屋作ったけど、どうする、スバルの部屋にする。」

「スバル君の部屋で。」

「即答。ミソラちゃん、ダメだよ。僕男だよ。」

「大丈夫だよ。スバル君、君は、そんなことは、しないキャラだから。」

「いや、キャラって。」

そんなやり取りをしていたら、大悟が帰ってきた。

「父さん、お帰り。」

「大悟さん、お帰りなさい。」

「お邪魔してます。」

「あっ、ミソラちゃん。いらっしやい。」

「大悟さん、ご飯にする？」

「飯にするよ。」

この一人は、星河大悟。僕の父さん。

今は、大悟、茜、スバル、ミソラでご飯を食べている。

「へえー、スバルとミソラが。」

スバルとミソラは、顔を真っ赤にして、ご飯を食べている。何故なら茜が付き合っていることをチクったのである。

「スバル、良かったな。」

「もう、辞めて、ご馳走でした。」

スバルは、さっそうと自分の部屋に帰って行った。

『スバル、顔真っ赤だぜ。』

「うるさい、ロック。」

くリビングく

今は、大悟、茜、ミソラで食べている。

「ミソラ。」

「はい？」

「スバルをよろしくない。」

ミソラは、頷きスバルの部屋に向かった。

「良かったな。スバル。」

「そうね。青春ていいわね。今日は、大悟さんに甘えようかな。」

「辞めるよ、茜。」

「スバルの部屋」

スバルは、一人で宇宙の本を読んでいる。

「スバル君、スバル君。聞こえないのかな。」

ミソラは、スバルの、耳元で息を吹きかけた。

「うわぁ、何ミソラちゃん。」

ミソラは、黙っていた。

「用が無いなら、本読むよ。」

何故か、ミソラの顔が真っ赤だった。

スバルは、本を読もうと本に目をとっそうと、思った時ミソラに抱きつかれた。

ミソラちゃん、やめてよ。と言おうとした時だった。唇にミソラの唇が当たった。

「んぐう。」

数秒たった。

「スバル君、嫌だったかな。」

ミソラは、なにか言われるんじゃないかと思っていた。

「いいよ。別に。」

スバルの、言葉にミソラは、びっくりした。

ミソラは、嬉しさのあまりスバルにまた、抱きついた。その時だった。

「いい物、見せてもらったわよ。」

「母さん、何みてんの。」

スバルとミソラの顔は、真っ赤だ。

「いいじゃないの、別に。」

「良くない。」

「まあ、いいわ。お風呂はいったわよ。

順番に入ってね、それとも…」

「はい、ストップ。」

「ミソラちゃん、先はいつていいよ。」

「うん、わかった。」

スバルとミソラは、順番にお風呂に入って、今は、スバルの部屋にいる。

「ミソラちゃん、僕のベッド使っでいいよ。」

「スバル君は？」

「僕は、もう一つだすよ。」

「ヤダ。」

「何で。」

ミソラは、顔をほんのり赤くした。

「一緒に寝よう。」

「だっダメだよ。僕、男だよ。」

「大丈夫だよ、スバルそんな事しないから。」

「そのセリフどっかで聞いた。」

部屋での出来事（後書き）

どうでしたか。

ハンターNB

次の日の朝。

「うーん、おはよう、ロック。」

スバルは、まだ眠いのか、目をこすりながら言った。

『スバル、久々に起きるの早いじゃねえか。』

「うん。今日は、サテラポリスに行くんだよね。何渡してくれるのかな。もしかして、新しく出た望遠鏡とか。」

『知らねえよ。でも、望遠鏡ではないな。』

「そっだよね。」

隣では、ミソラが気持ち良さそうに寝ていた。

『スバル。ミソラも連れて行くのか。』

「いや、連れてかなくて良いんじゃない。」

『分かった。じゃあ行く準備をしようぜ。』

「行かせないよ。」

後ろから、声が聞こえた。

「ミソラちゃん、起きてたの。」

ミソラは、頷いた。

「いつから。」

「結構前から。」

「じゃあ今日、僕サテラポリスに行くから。」

「えー、私も行く。」

スバルは、少し考えた。

「分かったよ。じゃあ準備しよう。」

スバルとミソラは、朝食を食べにリビングに行った。リビングの中にはいると、大悟と茜が笑ってこっちをみた。

「おはよう、って何で笑っんの。」

「いやー、朝からいい物見せてもらいました、新婚さん。」

スバルとミソラは、顔を真っ赤にした。

何故なら、茜が寝て居るスバル達を内緒で見て、大悟に言ったのだ。

「スバル、お前、一緒に寝るのは、ダメだろ。」

「いや、それは…ミソラが。」

ミソラは、驚いたようにスバルを見た。ミソラは、自分のせいになったことじゃあなく、スバルに呼び捨てされたことにおどろいていた。

「まあ、いいや。母さんご飯。」

「もう、出来てるわよ。」

そう茜に言われ二人は、テーブルに座った。

「スバル、今日どこ行くだ、デートか。」

「ちっ、違うよ、今日は、サテラポリスに行くんだ。」

「スバル、顔真っ赤だぞ。」

そう言われ、スバルは、顔を触った。

「本当だ〜。」

「ミソラちゃんまで、辞めてよ。ご馳走様でした。」

「私も、ご馳走様でした。」

「じゃあ、行ってくるよ。」

「いってきます。」

「気をつけて、いってくるのよ。」

「はい。」

二人は、元気に出て行った。

く日本コスモウエーブく

「おい、そこのお前、オーパーツって知ってるか。」

ヒートの電波変換した姿は、赤い体、バイダーは、こげ茶色、アームに鋭く尖った爪。驚っばい。

「お前、見ない顔だな。オーパーツって何だ。」

「オーパーツを知らないのか。まあいい、じゃあ死ね。」

ヒートは、電波君に突撃し、鋭い爪で引っ掻いた。

「うわああああ。」

電波君は、デリートされてしまった。

「ふうくどこにあんのか、オーパーツ。」

『そんな物、ないんじゃないか。』

「うるさい、レダ。」

くサテラポリスく

「いやあー、着いたね、久しぶりだね、スバル君。」

「そうだね。」

サテラポリスは、1階〜64階まである。
WAXAと合併している。

スバルとミソラは、サテラポリスの中に入って行った。その奥には、
暁がいた。

「あつ、暁さん、久しぶりです。」

「そうだな、サクサクサクサク。」

「暁さんって本当にうまい棒好きだよね。」

「ところで、何をくれるんですか？」

「ミソラちゃん、いきなり過ぎでしょ。」

「ああ、それは、これだ。」

シドウは、奥の机にあった、ハンターV.Gに似た物をスバル達に見
せた。

「これって、ただのハンターV.Gですよね。」

「いや、違うんだ。これは、ヨイリー博士の作った、ハンターNB
だ。」

ノイズとニュートリノ

「ハンターNBって何ですか。」

スバルは、首を傾げた。

「ハンターNBの頭文字のNは、ノイズ、ニュートリノを意味する。」

「じゃあ、Bは。」

「Bは、まあバージョンってところだな。」

「でも、ノイズは、メテオGを破壊してからなくなったんじゃないんですか。」

「ああ、でもほんの少しでも、高性能ハンターNBは、感知できる。」

「へエ〜。」

「でも、ニュートリノってなんですか。」

ミソラは、暁に質問した。

「ああ、それはだな…「暁さん、ここは、僕が。」

ミソラは、後悔した、スバルのオタクダマシイに火を付けてしまったことに。

「ニュートリノっていうのは、中性微子の仲間だね、ニュートリノ・ミューニュートリノ・タウニュートリノの…」

（やばいよ、スバル君のオタクダマシイに火を付けちゃったよ、何か話をそらせる話題はないのかな。）

「暁さん、他に機能は、ないんですか。」

「あつ、ちょっと。」

スバルは、いきなり話をそらされたので、いじけた。

「いいよもう。」

「他の機能は、うーん、あつそうだ、

前、電波変換をする時は、トランスコードだったたる。」

「それがどうしたんですか。」

「ああ、それが、ユニゾンコードになったんだ。」

「ユニゾンコード？」

「ユニゾンコードは、簡単に言うと合体だな。スバルは、NO・003、ミソラは、NO・004だ。」

「じゃあ、NO・002は、誰なんですか。」

いじけた、スバルが食いついた。

「NO・002は、今、任務をしている。」

「そうですか。どんな、人ですか。」

「そうだな、電波変換すると、ゼロ・セイバーになる。」

「ゼロ・セイバー？」

「ああ、紅蓮剣、ユーク・ド・バヤン・ソードを使う。そして、俺と同じで、電波PGで変換する。」

「電波PGってなんですか。」

「電波プログラムまあ、アシッドと同じってことだ。」

「お久しぶりです。」

シドウのハンターNBから一枚の白いウィザードがウィザードオンした。

「アシッド、久しぶり。」

「アシッド、お前生きてたのか。」

「私は、電波PGですから。あの爆発でバラバラになった私のデータをサテラポリスの

方々が探し出してくれたのです。それをヨイリー博士にメインコン

「コンピュータから、修復作業をしてもらい、今に至ります。」

「良かったね、アシッド。」

久しぶりに

スバルとミソラは、シドウのうまい棒についての話を3時間フルで聞かされていた。アシッドが止めてくれなきゃいつ帰れたか。今は、帰ろうとしていた。

「ミソラちゃん。もう帰ろうよ。お腹減っちゃったよ。」

それわそうだ、今は、午後2時。家を出たのが午前9時。サテラポリスに着いたのが午前10。ハンターNBについての話が1時間。そして…シドウのうまい棒の話が3時間。よく話が続く物だと感心してしまった。

「そうだね。私もお腹減ったな。」

「嘘!!」

何故驚くかというと、ミソラは、サテラポリスにいた時にうまい棒をたらふくたいあげられていた。それにも、シドウはびっくりしていた。そして…ほとんど食べられていたので、いじけていた。

「まあいいや。じゃあ帰ろうか。」

「待って。」

「どうしたの?」

「いや、せっかくだから…夕日でも見ながら。」

「別にいいけど…」

「じゃあ決まりね。いくわよ！ハープ。」

『ええ。ミソラ。』

「ユニゾンコードNO・004 ハープ・ノート」

ミソラは、ハンターNBをかざし天に突き上げた瞬間ピンクの光に包まれ、ハープ・ノートへと変身した。

「おっ先に〜。」

「あつ、ちょっと…ったくもう。」

「ユニゾンコードNO・003 シューティングスター・ロックマン」

スバルもハンターNBをかざし青い光に包まれ世界を3度救った英雄ロックマンに変身した。

『久しぶりの変身だな。』

「そっだね。じゃあ行くかうか。」

「サテラポリス上空ウェーブロード」

「どこだよ。オーパーツってやつはよ。」

鷲座のレダと電波変換をした、ヒートはサテラポリスのウェーブロードにいた。

『フフン。ヒートやっぱりないんじゃないか。』

「いや、アダムの言う事は確かだ。」

『まあいいか。探すのは、お前なんだし。』

激突

「サテラポリス上空ウェーブロード」

スバルとミソラは、電波変換をしている。

「うわあ、久しぶりだな。」

『そうだな。体も少し軽くなったんじゃないか？』

「……………」

「スバル君、コッチに来て。」

「今行くよ。」

『無視かよ。酷くねえか。』

「うわあ、綺麗だね。」

スバルとミソラが見ているのは、今にも沈みそうな夕日であった。

「ヒートとレダ視点」

「クソ、何処なんだよ。オーパーツ。」

ヒートとレダは、サテラポリスのウェーブロードにいる。

そして、このウェーブロードには、ロックマン、ハープ・ノートがいる。

『そういえば』

「うん、なんだ、レダ何かあるのか。」

『オーパーツなんてアダム様は、ないと言ってたぞ。』

「嘘つくんなら、お前、半殺しにするぞー!」

ヒートは、レダをワイザードオンにして、
レダの首を絞め頭を揺らした。

『嘘、嘘、嘘。やめろ死ぬ。』

ヒートは、さすがに手をはなした。

『死ぬかと思った。』

「おいレダ、あそこにいるのは、」

ヒートの指を刺した先には、ロックマンと
ハープ・ノートがいた。

『あいつら、感じた事がある周波数だ。……
思い出した、ウォーロックとハープだ。』

「ウォーロック、ハープ??」

『ああ、俺もFM星人だからな。あいつらが
地球に侵略した時、俺は、他の星にいたからな。面白い。行くぞ。
ヒート。』

「ああ、分かった。」

レダと電波変換したヒートは、一瞬にして、その場から消えた。

↳ロックマンとハーブ・ノート視点↳

ロックマンとハーブ・ノートは、夕日を見ていた。

「綺麗だね。」

「うん。そうだね。」

穂のぼぼしていた時、目の前に黒い影がみえた。

「なんだあれ。」

『スバル！！気をつけろよ。やばいぞ！あいつは。』

「ロック、どうしたの?」

『あいつは、やばい、感じたことのある周波数だ。くっ、くるぞ。』

目の前にいた、黒い影が目の前に来た。

『久しぶりだな。ウォーロック。』

『お前は、レダか。』

「レダって。」

『鷲座のレダ。コーヴァスやヴァルゴと同じ大悪党だ。』

『ふん、まあそつだ。フーン、ロックマンって言うんだ。』

「なんで、知っているんだ。」

「まあ、いい。立ち話もう面倒だ。

本題にはいる。お前は、オーパーツを使ったことがあるのか？」

「オーパーツ？使ったことは、ある。」

「やはりそうか。」

『おい！レダ、何故俺たちの名前やオーパーツを使ったことがあるなんて知っているんだ。』

『ウォーロック、知りたいか。倒せたら教えてやるよ。行くぞヒート。』

「待て、まだ俺たち名前乗ってないじゃん。」

『いいだろ、そんなの。』

「良くねえ。俺たちの名前は、レダ・ホークだ。覚えておけ。まずは、小手調べだ。

ホークスラッシュュ！！」

レダ・ホークは、腕を振り抜き鋭く尖った光を飛ばした。

「くっ、よけきれない。バトルカード、バリア。」

ロックマンとハーブ・ノートの周りにシールドができた。しかし、薄いバリアは、意図も簡単に破られた。

「くっ、くっわああああ。」

ロックマン and ハープ・ノート vs レダ・ホーク

ロックマンとハープ・ノートの周りに砂煙がまっていた。

「砂煙が邪魔でレダ・ホークが見えない。

バトルカード エアスチール。」

ロックマンの右手が扇風機のような形になり、その扇風機から強力な風がでた。

「よし、砂煙が消えた。どこだ、レダ・ホーク」

『スバル、上だ。』

ウォーロックの声に反応した、ロックマンは、上を向いた。

「ウイングショット。」

また、レダ・ホークから、鋭く尖った光が飛んできた。

「くっ、やばいな。」

その時だった。

「ショットノート!!!」

ハープ・ノートからいろいろな色の音符が鋭く尖った光に向かって飛んで行った。

音符と光が空中でぶつかり大爆発を起こした。

「ちっ、やるじゃねえか。ウイングオブホークー!」

レダ・ホークはロックマンに向かって突進した。形的には、リアリティトを食らった。

「うわああああ。」

「続けてホークスラッシュ。」

レダ・ホークは、ロックマンに鋭い爪で2回引っ掻いた。

「くっ、本当にやばい。」

「休んでるヒマはないぞ。ウイングショット。」

「くっ、ロックバスター。」

ロックマンは、左腕を構え、無数の球を放った。しかし、すべては、撃ち落とせられなかった。そして、3つの光がロックマンに当たった。

「うはあ　　はあ　　はあ　　はあ。」

ロックマンは、肩で息をしている。

「ぐはっ。強い。本当に強い。」

血を吐いた。

ロックマンは、もうボロボロだった。

ヘルメットは、ボロボロでバイダーは、かけていた。

「これで、終わりだ。もう少し楽しませてほしかったよ。さらばだ。」

ロックマンは、奥歯をおもいきり噛み目をつぶった。

「……ホークアックス。」

レダ・ホークは、斧を取り出した。

「さらばだ、ロックマン……!!」

レダ・ホークは、おもいきり斧を振り抜いた。

だが、

「……………えっ。」

ロックマンは、攻撃を受けていなかった。

何故かって、それは、ハープ・ノートが盾になったからだ。

「ハッ、ハープ・ノート？」

ハープ・ノートは、モロにレダ・ホークの攻撃を受けていた。

レダ・ホークのアックスから、血がポタポタと垂れていた。

「みつ、ミソラアアアアア。」

ハープ・ノートは、その場に倒れた。

「ロックマン、よっ、よかった、無事だったんだね。」

ロックマンは、ハープ・ノートに駆け寄った。

「ハープ・ノートなんでかばったの？」

「大切な人だからかな。はあっ、ロックマンいや、スバル君……生きて。」

ハープ・ノートは、そのまま、目をつぶってしまった。死んだかどうかは、分からない。

「ふざけんな、ふざけんな。」

怒りの矛先をレダ・ホークに向けた。

「うおおおおおおおおおお。」

大地と大気が揺れ始めた。

《ノイズ率9.999%……限界突破……ニュートリノ開放……スペースゲート……アクセス開始……アクセス完了……プラネットサーバー……アクセス……プラネットPGMダウンロード開始……ダウンロード完了。》

「うおおおおお。プラネットPGM発動。」

ロックマンが赤い柱に包まれた。

ロックマンの姿がプラネットPGMの力で変身した。

「ハアツ、プラネット・スター・ロックマン!!!」

体全体は、黒　　バイダーは、赤　　形は、Vの字
翼があり、右手には、剣を持っている。

その名は、レーヴァテインカオスフレイム。

「終わらせよう。ハーブ・ノートの為にも。行くぞ!!!レダ・ホ
ーク!!!」

ロックマン and ハープ・ノート vs レダ・ホーク（後書き）

あれ、エアスチールなんてカードあつたっけ?????
無かつたら、オリジナルってことで。

ロックマン変身しました。

どうでしたか？僕的には、あまりバトルシーン自信ない。感想よろしくお願いします。

怒り

「ふん、面白い。楽しませてくれそうだな。」

「行くぞ！！レダ・ホーク。カオススラッシュ。」

ロックマンは、剣を振り抜き衝撃波を起こした。

「ふん、ホークスラッシュ。」

衝撃波と鋭く尖った光がぶつかった。

ウェーブロードでぶつかり合った。

ドーンという音と同時に風がおき、ロックマンとレダ・ホークは、後方に吹き飛ばされた。

「面白い。面白すぎる。久しぶりだこんな戦い。」

レダ・ホークは、ニアツと笑った。

「何が面白いんだ。お前は、僕の大切な人を傷つけた。絶対に許さない。」

ロックマンは、鋭くレダ・ホークを睨んだ。

そして、一瞬にして、消えた。

「消えた。」

『ヒート、後ろだ。』

「何。」

ロックマンは、レダ・ホークの後ろに来ていた。そして、剣で切りつけた。

「ぐはっ！！！速いぞ。」

「ロック、行けるよ。勝てる。」

『おう。ハープとミソラの仇をうつ。』

「そう簡単には、負けないよ。ウイングオブホーク！！！！！！」

レダ・ホークは、猛スピードで突撃してきた。

「首ぐらい吹っ飛ばせるぞ。」

レダ・ホークは、スピードをまったく緩めずロックマンに向かって走った。

ロックマンも負け時と正面で受けて立った。剣を前に突き出した。

「ふん、そんな剣へし折ってやる。」

残り10m……………残り5m……………

レダ・ホークにロックマンの剣がぶつかった。レダ・ホークは、30m以上吹っ飛んだ。

「うはぁ……………くそっ……………俺が押し負けるなんて。」

レダ・ホークは、体じゅうに傷が痛々しいほどついている。

「もう、終わらせよう。PFB（プラネット フォース ビックバン） プラネットオブディザスター。」

ロックマンが手を上げ黒い球体を作り、その黒い球体をレダ・ホークに向け投げつける。

レダ・ホークは、黒い球体に吸い込まれた。

「くっ、なんだよ、この黒い球体。」

ロックマンは、手を合わせパワーを溜める。溜まったと思うと手を突き出した。

「レダ・ホーク、お前は僕の大切な人を傷つけたんだ。この攻撃は、ハープ・ノートの一撃だと思え。」

ロックマンの突き出した腕から、黄色い光線が放たれた。

「ぐっうわああああああ。」

レダ・ホークは、PFBを食らったのだが、まだポロボロになりながらも立っていた。

「くっううう、まだ…終わって…ない。」

「まだ、立てるのか。」

『ヒート、もう辞めるんだ。今のお前じゃ勝てない。』

「くっ、分かった。ロック……マン……今度は……絶対に……勝つ。」

レダ・ホークは、そういつて消えて行った。

『スバル、このPGM、すごい力だ。』

「そうだね。でも、少しやり過ぎたかな。」

ウェーブロードは、道が半分なくなっている
もう、ボロボロだ。

「ハープ・ノートは？」

ロックマンは、辺りを見回した。

「いたっ。」

30mぐらい先にハープ・ノートが倒れていた。ロックマンは、ハープ・ノートに駆け寄り
おんぶをした。

「サテラポリスの病院に連れて行こう。」

（太陽系外惑星）
分厚いドアが開いた。
開いたのは、レダ・ホーク。

「救護班、ヒールプレイスをつかわせる。」

ヒールプレイスとは、ピエールが作った、回復が一気に早くなる機械だ。人間が入れるくらいなのでかさのカプセルだ。

「はつ。」

一人の隊員がレダ・ホークに聞いた。

「何故、ヒート様がここまでやられたのですか。」

レダ・ホークは、「青い流星」と呟いた。

「えっ??」

レダ・ホークは、何も言わずヒールプレイスの中に入って行った。

〈サテラポリス病院〉

スバルはミソラをおんぶして、病院に運んだ。ここは、ミソラの病室。流石は、国民的アイドル部屋が豪華ってそれどころじゃないか。ミソラちゃんの傷は、そこまで深くなかったらしい。命に別条はないそうだ。ホツとしたのもあるけど、自分の無力さを感じた。

悔しさ

自分の無力さを感じると、何故か泣きたくなってきた。ミソラは、隣で寝ている。

スバルは、頭を抱えた。

「僕は……彼女も守れなかった。……僕は……本当に……弱い。」

『スバル……』

ウォーロックも悔しそうだ。プラネット・スター・ロックマンになりレダ・ホークを追い詰めたが結局逃げられてしまった。一番強いPFBでも仕留められなかった

「あまり、自分のせいにするなよ。」

ミソラの病室に入ってきたのは、暁　シドウだった。両手には、流星のうまい棒を抱えている。

「暁さん。でも……」

シドウは、優しく笑った。

「そんな顔するな。ミソラが目を覚ました時にお前がそんなにしょぼくくてちゃ駄目だろ。むしろ、僕があいつを倒したんだって自信持って言え。」

「でも、僕は、倒せなかった。悔しいんだ。ミソラちゃんをボロボロにしたあいつを

倒せなかった。おまけにPFBでも……………」

「スバル、でもな倒せりやなんでもいいじゃないだろう。もっと自信持てよ、お前は世界を3回救った真正銘のヒーローだ。まあ、俺もこつという時あったからな。」

「えっ??本当ですか。」

「まあな。この話は、今度してやる。」

「じゃあ、本題に入ろうか。スバルに渡されたプラネットPGMは、今ヨイリー博士がいろいろ見てくれている。」

あと、サテラポリスの警備ウイザードがニホンのコスモウエーブを警備中爪みたいな物で引っかかれていた、電波くんがいた。

警備ウイザードが電波くんをサテラポリスに持っていく、ヨイリー博士に渡したらしい、

ヨイリー博士も疑問に思ったらしく、解剖してくれた。そしたら、レダ・ホークとやらの残骸電波が引っ掻いたあとにあったらしい。で、もっと調べると悲しい事が分かった、電波変換していた人間の方が言いくいんだが……………何処かの国の……………」

シドウが大事な所を言おうとした時病室のドアが開いた。入ってきたのは、クインティア。手には、花束を持っている。

「シドウ、スバル君にはその話は、重すぎる。」

「ああ……………そうだな。スバルこの話は、忘れてくれ。」

「えっ、でも気になります。」

「気にしない方がいい。気にしないでくれ。」

シドウは、とても悲しそうな顔をした。

話ができなかったこととスバルは思ったが、他の理由かもしれないと思った。ずっとずっと悲しい、入ってはいけない領域に立っている気がした。

「……………分かりました。」

「じゃあ俺は、このへんで、じゃあなスバル。ミソラによろしく。」

「はい……………」

「じゃあ、私も二人の邪魔は、いけないわね。スバル君、さような

」

シドウとクインティアは、逃げるように病室を出て行った。

「本当に良かったのか、ティア。」

「ええ、今は、まだ駄目よ。何処かの国が
アメリッパのWAXAから、大量のミサイルの
設計図のコピーや、子供達の拉致、その子供達を……………」

「こんかいの敵は、二つかな。」

シドウは、そう呟いた。

「アメロツパ　　ホライティツク　ハウス」

「ロバート大統領、ロバート大統領。」

黒いスーツの男がノックをし入った。

「どうした、デービス。」

デービスと呼ばれる男は、赤いネクタイをしていて、鼻が高く、髪が金髪。目が鋭い。

「今、WAXAから、連絡がありました。

核ミサイルの設計図のコピーや、子供達が何人か拉致されたということです。」

「それは、本当か！！！！　　ちっ、もしかしたら

Z国かもな。」

「Z国、高い軍事技術のある国ですか。」

「ああ、噂では子供達を集めてその子供達に電波PGを使わせ強制的に電波変換させるといふ噂を聞いた。最近には、経済状況も悪いようだしな。」

ロバートは、深く考えた。3分は、頭を抱えて考えていた。

「よし、ニホン、アジアナ、シャール、アフリックのWAXAに伝える。アメロツパのWAXAに電波変換の出来る戦力になる人を集

めるとな。」

「はい……。分かりました。」

やっと

（2時間後）

スバルは、ずっとミソラの手を握っていた。
スバルも流石にレダ・ホークとの激闘もあり
疲れていたのか寝てしまった。

「うんっー……………」

ミソラが起きた。体は、包帯をぐるぐるにされていた。体だを少し
起こした。

「あつ、痛いっ。」

そこにハーブが心配そうに出てきた。

『大丈夫。ミソラ？』

「うん。大丈夫。スバル君は。」

『寝ているわよ。レダ・ホークも旦那が倒したわよ。』

ミソラは、顔を赤くした。

「旦那って。」

『なに、違うの。あゝ違うのか、じゃあスバル君に言わなきゃね
』。

「それは、ダメ〜。」

『ハハハッ、嘘よミソラ可愛いわね〜。』

ミソラは、頬を膨らませた。

「も〜う。」

「う〜っ。やべえ寝ちゃった。」

スバルが、少しうるさかったのが、起きた。

スバルは、ミソラのベッドに伏せて寝ていた。体を起こすと同時に衝撃が起きた。

「うはっ。だっ誰。重い。」

犯人は、ミソラだった。エへへと舌を出しながら笑った。

「ミソラちゃん、起きたの。」

「うん。起きたよ。」

『じゃあ、ウォーロック私達は、行きますか。』

『そうだな。未来の旦那頑張れ。』

ハープとウォーロックは、何処かに行ってしまった。ミソラの病室には、スバルとミソラしかない。

「ごめん、僕が守らなきゃいけないのに、僕の方が逆に助けてもら

つて。」

「聞こえたよ、スバル君の声。」

「えっ、なんの事。」

「ミソラくっつけて叫んでたよ。」

「あれは、必死で……………」

「嬉しかったな。自分もピンチなのに私の事を気にかけてくれてよし、これから、お互い呼び捨てね。」

「なんでいきなり。呼び捨てって、無理無理無理無理無理無理。」

「なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで。」

「はっ、恥ずかしいから。」

（可愛いなスバル君。）

「本当にダメ??？」

ミソラは、スバルに涙目＋上目遣いで攻撃した。

（それはなしでしょ、ミソラちゃん。）

「ああ、分かった。分かりました。」

「本当？いいの？」

ミソラは、一気に顔を明るくさせた。

「いいよ。でも、学校以外でね。」

「やった〜。大好きスバル。」

ミソラは、嬉しさのあまりスバルの胸に抱きついた、安心したのかミソラは、寝てしまった。

「ミツ、ミソラ寝ないでよ。」

スバルは、そつとミソラをベッドに寝かせた。その時だった、病室のドアがまた開いた。入ってきたのは、茜、大吾だった。

「父さん、母さん……ごめんミソラを守れなかった。」

茜は、そつとスバルを抱いた。

「母さ「怪我は、無かったのスバル。」

茜は、今にも泣きそうだ。それは、そうだろう子供が電波変換をし世界を3度救つても英雄ではない母親にしては子供に過ぎない。子供を大切にしない親は、いないといえは嘘になるが茜にとっては、英雄でもなんでもない可愛い息子なのだから。

「うん。でもミソラが……僕をかばって……」

「それはちがうよ、スバル。」

「えっ、ミソラ。起きてたの。」

ミソラは、起きていた。ゆっくりと体を持ち上げた。

「私の演技力舐めないでね。私は、スバルを

大切だから、いなくなつて欲しくないから……………」

スバルは、勢いよく立ち上がった。

「ふざけるな！！ 僕だってミソラには、いなくなつて欲しくない。僕だってミソラが大切なんだ。だから、危ないことは、辞めてくれよ。頼むよ……………。……………怖かった、ミソラがいなくなるんじゃないかと思うと本当に怖かった。」

「スバル……………」

スバルは、あまり怒らないだが私の事を大事に思ってくれていることとは感じた。

Z国のカ

くZ国 プリズム・ドーム

メインルームなのか、沢山の人々が忙しく働いている。奥には巨大なコンピュータがある。巨大なコンピュータの隣にはいくつもの小型のテレビがあり街並の映像、防犯カメラのような物だろう。中央には作戦を建てるデスクがある。その机に何人かの人々が地図を釘づけに見ている。

「作戦は、成功したようだな。」

「ああ。でもやるな世界最高峰のアメロッパのWAXAからミサイルのコピーと子供を拉致し、戦力が一気に増えたな。」

軍事帽を被った、濃い緑の服を着ていて軍証が沢山ついている。

「ああ、そうだな。これでアメロッパへの戦争に近づけるな。」

「やっとこれで、7年前の復讐ができるな。」

「どうだ、電波兵器 「ホーリー・レン」の
製造の調子は??。」

奥のコンピュータを操作している、男に話かけた。

「そうですね、ざっと1・000ぐらいですかね。」

「拉致をした子供達が400。この国の子供達が800人か……………」

「でも、世界最高峰のWAXAアメリツパ支部は、そんなに簡単には落ちないぞ。ホーリー・レンは、どのくらいの強さなのか。」

奥のコンピュータを操作している手が止んだ。

「そうですね。バトルウィザード 5体いつぺんにきても楽勝ですね。」

机に座っている一番偉いであろう男が、地図を指差し怒鳴った。

「狙いは、アメリツパ。我々は、アメリツパを殲滅し復讐を果たす。奴らは、ミサイルのコピーや子供達の拉致、多分我々の国がやった事を分かっているだろう。アメリツパを

我々の基地におびき寄せ、畳み掛ける。

絶対勝つのだ。勝てる戦力は、我々には、ある。アメリツパには電波体を作る人は、いないだろう。もし、他国との連合国が作られても我々には、勝利の2文字しかない。」

そう言い張ると部屋に戻って行った。

〈サテラポリス病院〉

〈 〉

スバルのハンターNBが鳴った。今現在は、医療機器がハイテクになり、病院でも他人の迷惑にならない限り病室でも、電話が出来るようになった。

スバルは、プッシュと書いてあるポップアップを押した。そしたら、シドウの顔が出てきた。

「曉さん。どうしたんですか。」

「スバル、お前は、今ミソラの病室か。」

「そうですね。」

「分かった。病室を出る。あまり聞かれないからな。」

「聞かれたらどうなりますか？」

スバルは、唾をゴクツと呑んだ、

「俺が、長官に怒られる。」

「そうですね……………」

スバルは、茜、大吾、ミソラに「ちょっと出掛ける。」と言い残した。

病院を出て病院の裏に来た。

「ここなら、大丈夫か。」

「大丈夫か??」

「はい。それで何ですか。」

「ああ。まずは、プラネットPGMについてだ。プラネットPGMは、何だかの原因でノイズから、ニュートリノに変わった。プラネットPGMは、多分ニュートリノチェンジだろう。」

「プラネット・スター・ロクマンは、ニュートリノ率200%でなれる事も分かった。」

「マージノイズみたいなものは、ありましたか。」

「あつたが、サーバーからの強力な、セキュリティのせいでのこの操作を受け付けない。だが、プラネットモードとは、あつたな。」

「プラネットモードですか。」

「ああ、じゃあプラネットPGMをお前に返すぞ後で。」

「はい。ありがとうございます。」

「スバル。」

シドウは、いきなり真剣な顔になった。

「何ですか。」

「WAXAアメロッパ支部から連絡があり、ニホン、シャード、アフリック、アメロッパ、アジーナに電波変換の出来る戦力になる者を集めろという事だ。どうする？スバル。」

「今、ニホンで決まっているのは、ゴン太、ジャック、俺、ティア、そしてツカサだ。」

「ツカサ君ですか??？」

「ああ、つい最近ツカサが和解から、帰ってきたんだ。」

「そうですか……。それに僕も参加します。ですが、ミノラは、連れていきません。」

「そうか。分かった。では、明後日の朝7時にWAXAに集合。」

「はい。分かりました。」

スバルは、電話を切った。

「また、戦いか。」

『いいじゃねえか。やり〜。』

「ロック、あまり喜ばないで。」

ミソラの思い

スバルは、暁と電話をし終えて、ミソラの病室に戻っていた。

「母さん、父さん……話があるんだけど……。……。ちよつと病室の外に。」

「どうしたんだスバル。」

大吾と茜は、スバルに従い茜と大吾は、外に出た。

「父さん、母さん。今日、サテラポリスから連絡があったんだ。明後日の7時にWAXAに集合……。そして、WAXAアメロツパ支部に行くんだ。」

「本当なの？スバル。」

「うん。本当だよ。」

「そうか……。ごめんな。スバル、力になれなくて。」

「いいんだよ。僕、頑張るよ。」

「あまり行かせたくないけど……。仕方ないは、それがスバルの使命だから。」

「ありがとう。じゃあ、先帰ってるね。」

スバルは、手を振り病院を出た。

『いいのか、スバル。ミソラに会わないで。』

「いいんだよ。会つと行きずらくなるからね。」

『そうか……………。』

スバルは、ウエーブライナーに乗った。

〈サテラポリス病院〉

茜と大吾は、ミソラの病室にいる。

「ミソラ、ねえ。」

茜は、ミソラの手を取りそつとミソラに話かけた。

「スバルがね、明後日アメリッパのWAXAに行くの。」

「えっ……………どういう事??」

「スバルは、多分ミソラには、危険なめにあってもらいたくないって思っているのよ。」

ミソラ、分かってあげて。」

「うっ、うん……………」

ミソラは、自分の力の無さを悔やんだ。

もしスバルが危険なめにあつても助けられない。助けに行きたいけど、この怪我じゃ足を引つ張るだけ……………。そう思つと自然に涙

が出てくる。

「ぐすっ……………ううっ……………うわぁぁん。」

茜は、ミソラを優しく優しく抱いた。

「コダマタウン」

約1時間。スバルは自分の家があるコダマタウンに戻っていた。

「戻ってきたね。」

『ああ、そうだな。』

すると、スバルのハンターNBにメールが来た。

「メールだ。暁さんからだ。」

スバルは、メールを開いた。

スバルへ

お前にプラネットPGMを返すぞ。

この、プラネットPGMにエースPGM・ジョーカーPGMの効果
をヨイリー博士に加えてもらったぞ。まずノイズチェンジをしてか
ら、

ファイナルライズをする。そして、新たなチェンジの仕方、ファイ
ナルフォースチェンジ

をする。ブラック・エースに変身したら、

プラネットPGMを起動させ、ニートリノ率を高める。そうする
と、プラネット・エースになる。レッド・ジョーカーの時は、プラ

ネット・ジョーカーになる。もちろんプラネット・スター・ロックマンになる事もできるぞ。

『だだよ。』

「知ってるよ。読んだんだから。」

『試してみようぜ。』

「今日は、寝る。」

スバルは、自分の家に向かって歩き出した。

「お~~~~い。スバル~~~~い。」

やってきたのは、牛島ゴン太だった。

「スバル。お前も行くのか、明後日。」

「うん。まあね。」

V S オックス・ファイア

「コダマタウン」

スバルは、家に帰る途中にゴン太に捕まってしまった。

「スバル、お前も行くのか…………… ロックマンがいれば心強いな。」

「そんな事ないよ。」

スバルは、首と手を左右に振り否定した。

「じゃあ、スバル。俺と勝負だ！…！」

「いきなりだね。…………… 今日…………… 『よっしゃー、殺るぞオックス』」

「勝手に決めないでよ。しかも、漢字がひどい。」

「よし、決まりだな。行くぞスバル。」

「ちょっと、人の…………… 『ユニゾンコード No.005 オックス・ファイア。』」

ゴン太は、人の話を聞かずに勝手に電波変換をしてしまった。

「もう、ゴン…………… 『スバル、俺たちも電波変換だ。』 ああ、もう分かったよ。」

ユニゾンコード No.003 シューティング・スター・ロックマン。」

スバルは、ハンターNBを空に掲げ叫んだ。
青い光に包まれロックマンに変身した。

「コダマタウン　ウエーブロード」

「スバル、本気でいくからな。」

「行くよ。オックス・ファイア。ロックバスター。」

ロックマンは、左手をオックス・ファイアに向け左手から、何発かの球がオックス・ファイアに飛んで行ったが、オックス・ファイアに当たったがオックス・ファイアの体は、無傷だった。

「こんな攻撃効かないぜ。今度は、こつちからだ。オックス・タックル。」

オックス・ファイアは、ロックマンに向かって突進をした。まるで闘牛のように。

「うわあ、今まで戦った時以上に速い。」

ロックマンは、間一髪で上にジャンプして逃れた。

「強くなったのは、お前だけじゃないぜ!!!。俺は、オックスと一緒に辛い修業をしたんだ。」

「どんな修業????」

「例えば、牛丼を食べないとか。」

「なんだと、牛丼好きのゴン太が牛丼を食べないだと、牛丼を食べないゴン太は、ゴン太じゃなくなるのか。」

「そうなんだよ。牛丼を食べない俺は俺じゃなくなる。」

「ゴン太、それは、とても辛い修業だったんだね。偉いよ。」

「だろう俺は……」「隙あり、バトルカード
ソード。」

ロックマンは、右手を剣に変えてオックス・ファイアを切ったが剣が折れてしまった。

「ソードが折れた。」

「不意打ちとは、ずるいぞスバル。くそっ、
オックス・フレイム。」

オックス・ファイアは、口から、火を出した。

「攻撃範囲が広がっている。」

ロックマンは、上にジャンプをした。

「それを、待っていたぜ！！ アンガーパンチ。」

オックス・ファイアは、体型の割には、高く飛んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2236y/>

流星のロックマン4 ラストエンジェル

2011年12月11日23時01分発行